

核被災に向きあう青年たち

幡多高校生ゼミナール顧問 山下正寿

1、ビキニ事件を追う高校生たち

四万十川をいだく山村や黒潮のよせる漁村に育ってきた高校生たちがいる。彼らのなかから、1983年の夏に「幡多高校生ゼミナール」というサークルが生まれた。

「足もとから平和と青春を見つめよう」と地域の現代史を発掘しはじめた。ごくふつうの地域のなかに現代史の証言者がおり、かけぬけた青春の足跡のあることを知った。

そして、1985年、広島・長崎の被爆40周年の年に地域の被爆者調査にとりこんでいた。この時、ビキニ水爆実験の被災漁船員を発見し、この巨大な事件にいどむこととなった。第五福竜丸をふくめ、のべ1000隻以上の被災船が太平洋沿岸の漁港にいたこと、そして被災漁船員たちが放射能障害で苦しんでいる実態に初めて光をあてた。

ビキニ事件で消された青春

広島・長崎に次ぐビキニの悲劇。私たち「幡多高校生ゼミナール」の調査をビキニ事件の真相解明へと導いてくれたのが、藤井馬さんと息子の節弥さんだった。馬さんは二人の子どもとともに長崎で被爆した。そのうち次男の節弥さんはマグロ船員となり、太平洋の核実験に遭遇した。1960年8月2日、彼は神奈川県久里浜の入院先を抜け出し、入水する。27歳の命を絶った。

調査を進めていくなかで、ビキニの水爆実験の犠牲になったと思われる高校生の事件につきあつた。室戸岬水産高校三年生谷脇正康さんだ。彼は、1954年5月下旬操業実習途中で体調を崩した彼は一人室戸に帰る。鼻血が止まらない、白血球数が1500に減るなど「再生不良性貧血」と診断され、担当医が「原爆症の疑いが濃い」と語った。第五福竜丸乗組員と同じ症状の肛門周囲炎や発声不能などの症状が加わり、高熱・全身の痛みにおそわれ、12月6日に急死した。幡多ゼミの高校生たちの調査は1年におよび、ようやく彼の死の背景が明らかになった。室戸岬水産高校の実習船がいた八丈島東方には梅雨前線が停滞し、この期間に日本で最高値の放射能雨が集中的に降っていた。彼はこの雨のなかで操業し、しかも痔病で体に傷をもっていた。

聞き取り調査の後、室戸の高校生は「地元、室戸でのビキニ調査は、毎日自分が登校している道の途中で行われたりして、日頃気にもとめていない所に、こんな大きな事実がかくされていたのかと驚かされました」と語った。

被災漁船員のいる港

高校生たちは、高知の港を歩きはじめた。彼らは、よくノートをとった。一言も聞きもらすまいとする態度にうたれたように、漁民は語ってくれた。高校生だから、この巨大な事件に光をあてることができたのかもしれない。

「放射能で死んだ者など、この町にはいない」——この厚い壁の後ろに、被災の事実を認めさせまいとする無言の圧力があつた。「ビキニ事件は今も生きている。過去の出来事だけではない」。高校生たちの調査は一軒一軒ねばり強くつづけられた。一人一人の証言が、ビキニの海をよみがえらせた。光った海、立ち上がった雲、死の灰のこと——。そしてマグロ漁業のすさまじい労働の場面も記録化された。ビキニの海を語りながら、彼らはマグロ漁民の誇りをとりもどしていった。そして、「二度とあんなばかげた実験で海をけがしちゃいかん」「被ばくしているなどとは考えとやない。しかし、昔の仲間が次々に倒れていく。自分の体もまともじゃない。不安だ」と声を出しはじめた。

幡多高校生ゼミナールの高校生たちはビキニ事件の社会的背景、水爆実験と放射能など「知りたいから学ぶ」本物の学習を積み重ねて、後輩へと引き継いでいった。「学び、調査し、表現する」活動は、幡多地域から室戸、東京（第五福竜丸）、焼津、広島、長崎、沖縄、韓国へと「平和の旅」を軸に広がり、ドキュメンタリー映画「ビキニの海は忘れない」など、社会に向けて潑刺とした意見表明を続けた。

2、高知と福島を結ぶ高校生たち

「地道で粘り強い活動」「ビキニ被災を広く捉え、訴えた」ことが評価され、2011年6月に第2回「焼津平和賞」を受賞した。福島原発被災の3ヵ月後であった。

この受賞をきっかけに、福島から高校生グループ「たねまきうさぎ」を迎え、震災・原発の朗読詩を発表してもらい、四万十川のカヌーや宿毛湾での釣りなど幡多の自然体験交流にとりくんだ。

朗読詩を聞いた高知の高校生は「福島の高中生に来てもらって、震災の実体験を語ってもらった。家を失い、お腹をすかせ、悲しんでいる場面が浮かんでくるようにわかった。自分たちもいずれおこる震災にむけて、ひとごとではなく自分のこととして聞こうと思った」と感想を書いた。

また福島の高中生は「私たちは、毎日低線量の放射線に被曝しています。ただ被曝しているという事実に怖がるだけや、知っているだけで何もしないのではなく、これからは放射能について学び、放射能の性質や被曝した場合どんな被害や対処法があるのかを知り、放射能を正しく怖がろうと思います。高知の方と触れあって、私の気持ちがりフレッシュできましたし、福島の問題と一緒に解決しようとしてくれていることを知り、高知にあって良かったと思います」「汚染された大地に生きる私達のこの思いを、今回のような行動で一人でも多くの方々に知ってもらえたらと思います。信じられないほど透き通った四万十川、熱帯魚が泳いでいた宿毛湾、海・山・川の幸、沢山の美味しい食べ物、この美しい高知が私達の故郷のように壊されてしまうことがあっては、絶対にいけません。二度と、

こんな思いをする高校生を作ってはいけません。機会があれば、またこの思いを言葉にしたいです」

「私は、普通の高校生活を送ることだけで精いっぱい、原発の問題は誰かが解決してくれる、自分の問題ではないと考えていました。ただただ政府の対策を待ち、それが遅いことを訴えるだけで、自分に何ができるかなど、これくらいも考えませんでした。何か自分のできることをすべきだと思っていましたが、結局自分には何もできないと決めつけ、自分を否定していました。今回こういった機会を得られたからこそ、その考えは疎かと思いました。高知で心に刻んだこと、体験したことをまずはたくさんの方に心の底から伝えようと思われました」

幡多高校生ゼミナールは、2012年8月に韓国釜山の高校生とともに、韓国被爆者（広島・長崎）調査を計画し、そこに福島や静岡の高校生の参加をよびかけた。広島・長崎・ビキニ・福島を結ぶ日韓高校生による核被災合同調査が始まったのだ。高校生たちは8月6日に開かれた「韓国原爆被爆者慰霊祭」に参加して、福島原発被災の実態を報告し、原爆被爆者と二世の人たちと交流した。そして7日には、釜山市内にある古里原発（市中心地より40キロに位置する。2月に原子炉1号機が全電源停止事故を起こしたのち、再稼働している）を視察、調査し、原発問題の学習会も開催した。日韓の原発問題は事故被害が共通していて、経済優先による再稼働の危険性について学びあう場となった

福島の高中生、再び幡多へ

2013年3月22～25日に福島の高中生7人と顧問1名を幡多に迎えての交流が終了した。

22日は土佐清水市窪津で大敷き網を見学し、組合長から大きなブリを寄贈していただきました。福島の高中生を招待していただいた「海癒」では、温泉に入り、テーブルを埋め尽くす多彩な料理を頂き、濱田祐介コンサートでは、特にフクシマをうたった「ゆきやなぎ」が印象深かったようだ。23日は元福島原発技術者・木村俊雄さんの原発・自然エネルギーの話と改造中の自宅でエコな暮らしの工夫をフィールドワークしてもらった。午後は映画会場に移動し、初めて7人のメンバーで、震災の朗読詩と原発に向き合う今の気持ちを発表した。24日は、四万十市「農夢民」ファームで餅つきとチラシずし作りを楽しみ、午後、幡多ゼミナール館に戻り、高校生座談会をおこなった。福島の高中生は「福島の現実を知ってほしい」と訴えた。

2013年8月には、原発事故現場が不安定なため福島を訪れることはできなかったが、宮城県石巻市を中心に津波被災をフィールドワークし、福島の方から体験を聞く[東日本大震災に学ぶ旅]を企画した。福島・静岡・高知の高校生・大学生・顧問とドキュメンタリー映画スタッフが参加した。

3、東日本大震災に学ぶ旅

「東日本大震災に学ぶ旅」を終えて

立石 佳歩(静岡・高校生)



印象に残ったのは、10日のフィールドワークで行った日和山と石巻市立門脇小学校だ。

生徒達が避難する時に使った墓地脇の階段から日和山に登り、住人達が使った別の階段を使って下山した。途中の坂や階段は急な場所もあり、大人でも辛い道のりだったと思う。そこを、津波に追われながら200人を超す小学生が駆け上がったのだ。教員は、教卓を斜面に積み重ねて山を登ったという。

門脇小学校とその周辺の市街地は、津波に流された車が出火したことで大規模な火災が発生し、校舎は黒く変色していた。市街地には生徒の家もあり、門脇小の先生は寒さから守るため、また自分の家が燃えているところを見せたくないため、子どもたちにブルーシートを被せたという。多くの市民が避難した日和山の周囲は水に囲まれ、数日間閉じ込められていたそうだ。水が引いた後の小学校のプールにはたくさんの車が浮かび、その中には逃げ遅れた人の遺体があったとも聞いた。

日和山から市街地を見下ろすと、復興しているようで、随所に震災ガレキと選別された鉄クズが山となって置かれていたり、雑草が生え放題の空き地があったりと、自分の中の認識とのギャップを切に感じた場所だ。また、ガイドの方の実体験も聞いていると、人の生き死にの儚さも感じた。門脇小の生徒と教員は、下校していた7名以外、全員無事だったそうだ。これは、日頃の訓練の賜物だと思う。今まで学校の避難訓練も、地域の防災訓練も、危機感を持たずに参加してきたが、この訓練が、地震発生時、生死の分かれ目となるだろう。

全国の高校生に知ってほしいこと

～高校教員・大貫 昭子さんの報告～

地震が起きた晩には、私が勤めていた小高工業高校の体育館に、津波で家族が流された人、病人、臨月の妊婦など1500人が避難してきた。翌日、高校がある場所は原発から30km圏内であったため住民は強制的に避難することになった。しかし、放射能について何も知らされていなかったもので、阿武隈山系に逃げた人たちは高い放射線を浴びた。4月からは、原発30km圏内の県立高校10校がサテライトとよばれる方式で、県内20以上の学校を間借りして授業が再開した。小高工業高校も、二本松・会津若松・郡山・岩城・南相馬に分かれることになり、みんなバラバラになった。近くにサテライト校がなければ母校

を捨て転校しなければならない。再開されたといっても、教科書も筆記用具もなく、工業高校なのに実習設備がない。南相馬のサテライト校では体育館を6つに区切って教室を作り、授業が行われた。到底満足のいく学習環境ではなかった。全校生徒がやっと集まるができたのは、その年の7月に野球の県大会で野球部が勝ち進んだ時だった。同じ色のTシャツを着てみんなで一生懸命応援した。

今の高校2年生は、これまでの高校生とは何か違うと感じた。この子たちは中学3年生の時に、遠足に行けず、修学旅行に行けず、部活動ができないなど中学校の締めくくりの時期に必要な、年齢にふさわしい体験を経ないで高校生になったのではないだろうか。この子たちは、大人になった時、どのようなものの考え方をし、どのように友人と付き合うか、また、どのような金銭感覚を持つのだろうか。このことは、数字として表れない心の問題であるために心配している。

原発事故は2つの意味で残酷である。1つは、「命と健康における残酷さ」である。これから30年後、40年後、この放射能がどのように体に影響を及ぼすかわからないまま、特に若い人はずっとこの不安を抱えながら過ごさなければいけない。もう1つは、「原発事故が心を壊していくことの残酷さ」である。被災地域でも、最低限の住む所があり、服も買え、食べるものに不自由はしていない。それは一見、普通に暮らしている光景に見える。しかし、被災した人たちの生活環境や教育環境は酷いものである。住む場所を奪われ、職業を奪われ、多くの人たちが現在の生活や将来について戸惑っている。平和的に生きる権利・人間らしく生きる権利・きちんと教育を受ける権利など憲法に保障されている権利が、被災した人たちにはない。しかも、この異常な状態を「あたりまえ」としてとらえる気持ちになり、心がどんどん壊されていっているのではないか。さらに、日本中の人たちが「被災した人たちは、明るく頑張っている。大丈夫じゃない。」と思うようになることは、全国の人たちの心も慣らされ、壊されていっているように感じる。生徒の中には、原発事故の爆発音を聞いた子もいる。津波にさらわれた肉親を探すこともできないまま避難した子もいる。子どもたちが、これから真実を学び、未来を自分の力でかちとって、社会に貢献してくれることを信じていたい。

見えない怖さ ～福島・高校生の報

尾形 沙耶子(福島・高校生)

私は福島市に住んでいるので、放射線量もそれほど高くなく、普通に毎日生活しています。しかし、私の通っている高校は、渡利地区といって福島市の中でも特に線量が高いところにあります。学校の校庭の土は入れ替えをして、除染を行ったのでだいぶ下がりましたが、結局プールの授業はなくなりました。

また、学校の近くにある弁天山という小さな山は非常に線量が高いです。震災直後、車の中で線量を測ると2マイクロシーベルトもありましたが、2年以上経った今も、0.8マイクロシーベルトもありました。そこは中学生や高校生の通学路でもあるので、危険な場所だと思いました。福島市の北の方の飯坂町にさくらんぼ狩りに行ったときは、車の中は

0.2 マイクロシーベルトと低かったのですが、いざ果樹園の中で測ってみると 0.6 マイクロシーベルトに上昇。テレビで安全だと特集されていたから行ったので残念でした。このように、モニタリングポストがないところは線量が高いのか低いのかわかりません。普段歩いているところが高い可能性も充分にあるので、放射能が見えないって本当に怖いなと思いました。

福島と高知と静岡の生命の種まき

田村 俊法(高知・高校生)

高校生・大学生の交流会があり、そこでは福島県出身の学生たちが実際に被災した体験談を語ってくれた。県外の大学に行った学生の言葉は、とても印象的だった。

「電気、ガス、水道、何もかも止まってしまう仕方なく家の近くにあった井戸水を放射線量が高いとは知らず、飲んでしまいました。放射能を体の中に大量に入れてしまったので将来、病気になるかもしれないのでとても怖いし、不安です。」

あまりに生々しく辛い体験だなと心が痛くなり、それと同時に原発がどれだけ危険で、人間がコントロールできる範囲を超えている不安定なものかがよくわかった。

憲法第 25 条「生存権、国の生存権保障義務」がありながら、なぜ国は緊急事態のときに正しい判断と対応が遅れたのだろうか。

今回、この活動に出会わなければ、福島・静岡の仲間や先生方には会うことがなかった。そして、人の生命とはどれだけ儂く尊いものなのか改めて気づかされ、生命について考えさせられる場面に多く会うことはなかっただろう。福島の現状、真実を知って自分の考え方が大きく変わったように感じる。自分の常識では考えられないことが現実にかかることもある。自然は生きているんだなと思わされる瞬間だった。

4、ドキュメンタリー映画「種まきうさぎ」

幡多高校生ゼミナールは福島原発被災の 8 ヶ月後に、福島から高校生朗読詩グループ「種まきうさぎ」を迎えました。2013 年 3 月 22～25 日に再び福島の高校生を幡多に迎える交流し、ドキュメンタリー映画「種まきうさぎ」はここから撮影が始まりました。高校生座談会をおこなったとき、現実認識の差を感じ、福島の高校生は「福島の現実を知るために来てほしい」と訴えた。これに応えようと、8 月静岡・高知・福島の高校生・大学生と宮城県石巻市中心の震災フィールドワークと福島の漁業・農業者・教師を迎えてシンポジウムを行った。

2014 年は、延べ 6 回の福島調査のうえ、福島でも低線量である相馬市松川浦地区をフィールドワーク地域に選びました。低線量地域でも余分な被ばくを避けるための放射線防護について理科の教員からアドバイスしてもらい、線量計を持ってフィールドワークを行いました。参加者自ら放射線防護を実践することで今後の生活で、余分な被ばくを避ける方法を学んだ。

初めての全国規模の「集い」であり、福島に負担をかけないように参加者の自主的な運

営協力をもとめ、すべて青年主体の運営となった。核被災と向き合うシンポジウムは、広島・ビキニ・セミパラチンスク・福島の核被災を結ぶ討論ができ、交流会も全国の取り組みを学び、友情を深めた。核問題を追及し、セミパラチンスクと結ぶ活動を続ける広島、被災地ツアーを企画する東京、昨年につき参加した静岡・高知の青年が、日頃の自主活動を生かし「集い」を支え「こんな素敵なお高校生・大学生がまだいるんだ」と社会人参加者を驚かせた。

青年が福島の被災地スタディツアーを行い、駅に放置されたままの高校生の自転車、荒れ果てた家や田畑の現実を自分の目で見、避難した高校生・大学生や踏みとどまっている漁船員の生の声を聞き、自分がやるべきことを発見しました。福島大学ボランティアセンターの大学生も参加して、今後のネットワークづくりのきっかけとなりました。青年を突き動かす「失われたものの重み」が福島にはあり、「フクシマに連動することで日本の教育は変革できる」可能性を示している。

参加した青年の感想(抜粋)

一人暮らししているアパートの近くの公園で子どもが元気に遊んでいる様子を見ると、平和だなんて思う。最近の福島では見かけなかった光景だからこそ感じることなのだろう。当たり前のことを原発事故の影響でどれだけ制限されているか、違う地に来てこそ余計に感じる。

各地で原発を再稼働するかしないかと問題になっているが、もう一度福島原発事故を思い出してほしい。原発を見つめ直してほしい。原発事故から3年半も過ぎている福島が、今どのような状況にあるのか、知ってほしい。今でも原発事故は収束してなくて、放射の影響はこれから先も続いていくということを…。尾形 沙耶子(福島・大学生)

今回福島を初めて訪れてみて、今政府がすべきこと、私たちにできることはなんだろうと考えた際、「忘れないこと」ではないかと思います。現地を訪れることが一番ですが、無理なら福島の現状をきちんと知る機会を作ること、皆で問題意識を持つことが大事だと思います。私は今回の集いとフィールドワークから、人に伝えることを実践したいと思います。二上真衣(広島・大学生)

仮設住宅で、いっしょにカザフスタンのダンスをおどり、カザフスタンの折り紙をつくるのを教えたりもしました。この三日間、私はあたらしい大切なことを勉強しました。福島に行くととてもうれしかったです。カザフスタンに帰って、わたしは今回のことを伝えたいと思います。ボラトワ・シャリアット(カザフスタン・高校生)

この後、映画の撮影は、広島での報告会、埼玉秩父のユネスコ協会の演劇活動、マーシャル諸島からフクシマを訪問した島民との交流などが記録されています。森 康行は「2年あまりの撮影の中で高校生から大学生になって活動する姿も成長の跡が見られるように

なっています。と同時に時々の活動の中で思いもよらない問題提起によって動揺する様子もとらえられ、それが成長に結びつき、そのことを自分の言葉で言うことで他の若い人たちに種がまかれている様子も垣間見られます」「漁師たちの苦悩そして放射能汚染に立ち向かい多くの人たちと交流しながら、遅滞とした歩みではあるがどっこい生きていく姿も浮彫にされつつあります」と述べている。

高校生の自主活動が全国的に衰退し、大学生の社会参加も厳しい現実と比較すると、まだまだ立ち遅れている。一方で教育統制が進み、教職員も身動きとれない学校現場が増えている。核被災の現実を直視し、高校生—大学生—青年を結んで、新たな自主活動発展を探求しあう場が求められている。

ドキュメンタリー映画「種まきうさぎ」は、7月に完成し、映画の上映活動を通じて全国に「平和の種まきうさぎ」が広がっている。

5 原発と教育

ビキニ事件の実相は教科書で教えられないまま、現代史から消滅させられた。「原発安全神話」の教育が、「新たな化粧をした原発必要神話」として登場している。青少年に原発事故の現実や自然エネルギーの可能性を教えず、「電気づけ」にしたまま、原発再稼働を押し進める教育を学校に押し付けようとしている。来たる「大震災」対策を津波から逃げることに矮小化せず、避難所対策(電源・保温・加熱など)、放射能防護対策を立て、子供たちの安全確保とエコ学習にとりくむ。

東電原子力技術陣約 3000 人、専門性のベールに覆われた原子力部門は、社内外から「原子力村」と呼ばれている。「原子力村」は、東電内にとどまらず、政界、官界から、学界、労働界をも巻き込む広大な世界だ。

福島原発事故について、今、「原発安全神話」を作り出した科学、文化、教育、マスコミ関係者の責任を追及し、子ども・父母・教職員を「原発見学」に参加させた教育委員会や学校の姿勢を正していくとともに、子どもたちを放射能汚染から守る対策が急がれる。

福島の高校生、教員、元教員の人たちと交流する中で福島の教育行政の対応に問題を感じてきた。浜通りで津波や原発被害に遭い都市部の進学校に避難している高校生たちに対して、在学中の高校生たちとの交流をすすめず、従来通りの進学勉強態勢を維持しようとしたこと、転校希望生徒に「あなたはこの学校の学力についていけますか」と問いただし

< 8 >
ていたことなど、今までの学校間格差教育を反省し、人を育てる教育の場として学校を再生しなければならないと思ったという教員の発言があった。

避難地域の子どもの受け入れ態勢の整備、校庭・公園・通学路の放射能除去作業、学校給食の安全化、カルシウム・マグネシウムなどの適切な摂取による体内被ばく防護な

ど科学者・医師と教育者が連携して、年間1ミリシーベルトよりはるかに引き下げる放射線防護対策が求められている。学校では、教職員、父母がともに子どもたちに放射線から自分を守るための科学的な判断力を育成していくことと、原子力に頼らないクリーンエネルギーや暮らし方の見直しを含む学習が求められているのではないだろうか。

「原子力村」関係者のほとんどは一流大学をでた「勝ち組」エリートであり、立身出世の一つのモデルでもある。「地位・名誉・財産」はあるが「人格・良識・良心」の欠落したエリートが「戦争なみの原発被害」をもたらし、再稼働をすすめている。こうしたエリートをめざす教育がすすめられてきたことを根本から見直す必要がある。教育もまた「受験学力神話」から脱皮し「人格形成の教育」を取り戻すことが求められている。

小学・中学・高校と成長に応じて家族、地域、日本、世界へと視野を広げる時に、「受験づけ」「スポーツづけ」「資格試験づけ」などで人格形成の機会を棚上げしていないだろうか。「人に勝つ」ことにこだわりすぎる歪んだプライドは、進路などで敗者となった時に、他人への攻撃性をもち排他主義や民族主義に転じる可能性もある。高校や大学の進路がますます厳しくなり、身近な社会とのつながりを持たないままでは、進路選択もできず、進路が絶たれる深刻な事態に直面しても打開の道筋を見つけることは困難だろう。足元の農林漁業、地域産業や地域づくりに関心を持ち、若い感性でチャレンジする意欲を育てる労働学習をすすめたい。

6、自主活動の学び — 「橋多ゼミにおける学び」

● 活動の主体であるフィールドワークによる地道な現代史発掘調査についての意義は「調査は地道ではあるが発見があり、ゼミ生は緊張してノートにメモをはしらせる。顧問と対等に近い関係で活動が進行することもゼミ生には好評であり、事後の報告会・反省会を経てつぎの調査へと発展していく。同じ調査でも感想が違い、するどい指摘なども出され『真面目な話』ができる友人関係が自然にできあがっていく」という。そういった生徒同士の交流の中で、『同級生なのに、人前ではっきり自分の意見を言える人がいて、驚いた』と友人に刺激されて自己成長していくゼミ生が多い」と述べる。

● 「平和の旅」については、『広島・長崎に行って学ぶ』ということだけでなく、『自分

たちの地域にある広島・長崎との関連を事前調査し、自らの問題にひきよせて参加する』ことを大切にしている。また、「旅は異なる環境・歴史・人びとにふれることによって世界と自分との結びつきを感じさせてくれ」、高校生たちは、韓国にも旅をして、外国とおして日本を見て、これまで見えなかった日本の歴史と現在とが見えてくる。

- 「幡多ゼミのこの一連のとりくみは、ありのままの地域と歴史の探究過程であり、新たな歴史的事実の発見による地域発見が、高校生の知的想像力を旺盛にし、死者との共生をベースに活動を持続させていっている。このとりくみで高校生が獲得した、歴史認識に裏打ちされた地域認識の深まり過程が、同時にかけがえのない仲間（死者を含む）とともに生きる共同体づくりでありえたことが、活動を持続させた要因であったといえるのではないだろうか。（「地域生活文化への参加とアジア市民形成の鼓動」吉田和子）

7、18歳選挙権で問われる自治

- 学校で「自立的人格形成」と「社会的教養の獲得」を意識して学習課題と位置付けているか。18歳選挙権は、主体的に自分の家族・地域・社会を見つめ、参加する姿勢を育てるなかで充実した権利となる。そのためには学校での自主的な生徒参加の自治が保障されなければならない。過度な職場の多忙化は、生徒との人格的学びあいの機会を奪うだけでなく、労働者として無権利な姿勢を生徒に伝える危険性もある。

- 教育は社会を継承するだけでなく、前進させる力量を持った青年を育成するという進歩的性質をもつべきではないか・・・保守勢力のいう「教育的中立」は、事実を知らせず矮小化する役割を教育に持ち込み政権を補完するという「政治的偏向」をしている。

- 、教育運動の側にも学校における自治権への消極的評価があるために、高校生の自主

活動が飛躍的に発展しない原因をつくっていないだろうか。全国の高校生的人格的成長が先おくりになされ、青年の社会参加を遅らせており、日本の民主主義的發展にとって、青年的人格的成長は大きな国民的課題となっている。

● 「フクシマに連動することで日本の教育は変革できる」・・・無数の反原発学習集団が社会の歪みを見つめ、子どもの命と成長を守り、支えようとしている。この流れに、自然・環境・健康・食・地域づくり・子育てのNPO・市民グループと民主的組織が連携し教育改革・社会改革の地域・全国的ネットワークが形成される条件が出来ている。

***参考文献** 一 本「核の海の証言」新日本出版社、「福島は訴える」かもがわ出版、報告集「津波・原発被災に向き合って」「核被災に向きあう青年たち」幡多高校生ゼミナール編 DVD「ビキニの海は忘れない」「渡り川」